日記中より

柳井榮

△月△日、お前は出駄羅目なあやふやな不眞面目な、こんなだらしのない勉强の仕方を幾日續けやうとする氣なのか？お前はお前の机の上に置いてある、お前自身が心に誓つて作つた日課表を見て恥かしいとは思はぬのか、自責の念に堪へないのかよく考へて見ろ、故郷ではお前の兩親達が土と汗とにまみれながら眞黑になつて、お前の成功を祈りつゝ營々として働いて居るではないか。お前は日々學校に通つて安らかに勉强の出來る幸福な身ではないか、然るにお前は日々不規律なだらしのない勉强をするとは何事だ、お前は普通一般の人々とは責任が異ふ、お前は故郷を發つ時重大な責任を果すことを父や母に、更らにふる里の山川草木に誓つた事を忘れはすまい、精進せよ。そして努力せよと。僕は叱られる樣に覺へた。

△月△日、十一時を過ぎた頃師範の△△上人から手紙が届いた、文面の一節にかうした文句があつ

た、『帝大に於て龍尾たらん人よりは、祖山に於て牛頭たるその狹さやうなるつまらなげな牛頭は、即ち世界の首にて候、（中略）只だ只だ眞面目に進まれ度候、眞面目の前には敵も味方も無條件にて平伏可致候。泰山を抱きて北海を越へんよりは祖山に抱かれて名をなして、關門を越へられ度く云云。』僕は實に感佩に堪えなかつた。

△月△日、八時頃だつた、僕が佛教讀本を讀んで居たら、隣室の松井君が自分の日記帳を持つて僕の部屋に入つて來た、そうして日記の二、三を讀んで聞かした。松井君の言ふには日記帳に三年間一日も缺かさずに日記する者は、必らず社會的に、爲すある人であると。僕の日記は常に斷續だ。松井君に僕が來年の正月から一日も缺さずに記して見せるよと言つたら、馬鹿言つちやあ困まるよ、今日の日記が滿足に出來ない者が來年からなんて、それはとても駄目だと松井君が笑つた。

△月△日、世の中が進むに從つて種々奇怪な、然かも複雜極まる事件が續出し新聞を出駄羅目に賑やかす。今日の新聞に曰く、最高學府たる帝大の學生があばれる。早稻田の右傾學生が横行して校庭に血の雨が降る。政治家があばれる。不良の生徒をなぐつて訓導が傷害罪で遂に檢事局に送らる等々これ所謂思想惡化の一現象とも云ふべきものだ。